

Title	<書評>Lawler, E. J., Thye, S. R., & Yoon, J. (Eds.). (2015). Order on the Edge of Chaos Social Psychology and the Problem of Social Order. Cambridge University Press.
Author(s)	Gu, Yi
Citation	年報人間科学. 41 p.83-p.87
Issue Date	2020-03-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/75378">https://doi.org/10.18910/75378</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 〈書評〉

**Lawler, E. J., Thye, S. R., & Yoon, J. (Eds.). (2015). Order on the Edge of Chaos Social Psychology and the Problem of Social Order. Cambridge University Press.**

GU YI

本稿で紹介する本は『Order on the Edge of Chaos: Social Psychology and the Problem of Social Order』という、社会心理学からの知見を援用しながら社会学における「秩序問題」への答えを集めた論文集である。

「社会秩序はいかにして可能か？」という秩序問題は社会学の前史から既に存在し、姿を変えながらも社会学史を貫いて問われ続けてきた一つの問題群である。秩序問題を最初に定式化したのは、早くも17世紀のホッブスである (Hobbes 1651=2010)。ホッブスの場合、秩序問題は「いかにして自然状態から脱出し、平和の状態を実現するのか」という平和問題となっている。ホッブスの影響を受け、秩序問題はその後多くの論者によって取り上げられた。社会学に話を限定すると、20世紀の半ばにパーソンズは、ホッブスが定式化した秩序問題を再び「ホッブス問題」として取り上げ、「規範」による社会秩序に注目する「主意主義的な行為理論」を提示した (Parsons 1937)。しかし、このパーソンズの「規範解」はその後、現存社会制度の正当化という保守的な側面をもつ (Davis 1959)、社会変動をそもそも説明できない (Lockwood 1956)、さらに過度に社会化された人間像をもつ (Wrong 1961) など多くの批判を浴びてきた。それでも秩序問題は社会学における基本問題の一つとし受け継がれた。例えばガーフィンケルは、エスノメソドロロジーにおける基本的な問いとして「日常世界の秩序はいかにして可能か」を提示している (Garfinkel 1964)。また、合理的選択理論に基づくゲーム論の視点からすると、秩序問題は公共財の供給問題へと置き換えられる (Taylor 1987)。

なぜ秩序問題はこれほど一見異なる問いを内包するのだろうか？これは「秩序」概念それ自体と関わる。というのは、秩序の概念の背後には必ず観察者の視点がある (盛山 1991:22) からである。言い換えれば、秩序問題は、観察者が社会をどのようなものだみなすかという認識論が必然的に絡んでおり、その延長線上には、さらに「社会とは何か」という社会学における究極の問い (佐藤 2008) があるといえよう。

では本書は、どのように「秩序」を定式化し、またどのようなアプローチを用いたのだろうか。その題目からわかるように、本書では秩序を「混乱寸前の秩序 (order on the edge of chaos)」として理解している。イントロダクションでLawlerが提示したように、混乱寸前の秩序とは、「移り変わる時間と状況の中で、絶えず解消してまた再構築される秩序及び予測可能性」(本書：1) のことである。これは本書で取り上げている著者たちの間での共通認識といえる。またその副題が提示しているように、本書は社会心理学的な視点から秩序へとアプローチするものである。社会心理学は本書においてまたミクロ社会学を意味する。

なぜなら「混乱寸前の秩序」はまさにミクロの相互行為の中で絶えず解消しまた再構築されるものからである。

本書の内容構成を素描していこう。本書は先ほど言及したLawlerによるイントロダクション及び最後にあるMarsdenによる結びを除いて、14の章からなっている。ここでは、本書の構造をより明示的に提示するため、章ごとに順次紹介するのではなく、いくつかのクラスターに分けて各章を分類しておくことにする。まず本書でとりわけ注目すべきキーワードとして、「感情」があげられる。何等かの形の感情を扱う著者は半数あり（第2,6,7,8,9,11,14章）、したがって「感情」概念に基づいて秩序問題へとアプローチしたものをまず第1のクラスターとする。このほか、選択理論をベースにした理論（第3,4章）があり、ここではこれを第2のクラスターとして扱う。最後に、残りの論文（第5,10,12,13,15章）はそれぞれ異なる理論背景から秩序問題へとアプローチしたもので、これらをここでは「その他」として扱う。ただし、これから見るように、理論的背景は異なるが、何等かの形で社会心理学的な知見を援用していることはこれらの論文の共通点といえる。

### 感情アプローチ

まず感情アプローチの章を見てみると、Turnerの章「the Evolution Biology and Sociology of Social Order」（第2章）は特に感情能力の進化という視点から秩序問題をアプローチしたものである。ターナーによれば、核心においては個体主義者の人間は、まさに進化の中で獲得した感情能力によって始めて、相互作用を通してミクロにおける社会連帯を作り出せた。

Lawlerらの章「Social Exchange and Social Order: An Affect Theory Approach」（第6章）は感情を交換理論への導入によって秩序問題を答えようとしたものである。彼らによると、感情はミクロにおける重複する交換の結果として生起し、さらに責任感を介在してよりマクロな社会的単位へと帰属される。結果的にミクロにおける交換は、マクロにおける秩序を維持するように機能する。

第7章の「Institutions, Trust, and Social Order」（第7章）では、Karen Cookは「信頼」を考察している。彼は先行研究の中では、信頼の社会秩序構築能力を過大評価する傾向があり、信頼は相互行為の秩序の重要な側面の一つであるが、それだけではマクロな秩序を構築するのは不十分だと指摘している。

第8章と第9章は、ともにアイデンティティによって媒介される感情の秩序維持に注目している。第8章の「Identity Verification and the Social Order」（第8章）で、Peter BurkeとJan Stetsは、社会構造は役割アイデンティティ確認の結果だと主張する。なぜなら役割アイデンティティ確認は、ポジティブな感情を生起させ、行為者は役割アイデンティティを実践するように動機づけるからである。

一方 David Heise らは「Identities, Roles, and Social Institutions: An Affect Control Account of Social Order」（第9章）で、アイデンティティは制度的な現実には埋め込まれており、同時に当の制度に関する個人の感情的な意味及び実践的な知からなるものだとことを確認している。

Kemperは「Status, Power, and Social Order」（第11章）で、社会的地位と権力の視点から、秩序問題へ

とアプローチした。彼によると、地位・権力関係の異なる行為者の相互行為は、その状況に応じて感情を生起する。その中には、社会的秩序の維持に寄与するもの（例えば誇り、恥、罪など）もあれば、逆に社会的秩序を脅かすものもある（例えば怒り、悲しみ）という。

第14章の「Dignity as Moral Motivation: The Problem of Social Order Writ Small」（第14章）で、Steven Hitlin と Matthew Andersson は感情の中でも特に「尊厳」に注目した。彼らによると、集団のメンバーは感情的褒賞を与える「尊厳」を希求する。その結果として尊厳は社会的秩序の再生産に寄与すると彼らは主張する。

### 合理的選択理論アプローチ

第3章と第4章は、ともに広義の合理的選択理論を用いて、フレーム選択を扱っている点で共通している。Lindenberg の章、「Social Rationality and Weak Solidarity: A Coevolutionary Approach to Social Order」（第3章）では、「社会的合理性（Social Rationality）」の概念を提示した。社会的合理性とは、合理性を人間の社会性と共進化した産物として捉える視点である。この人間の二重性によって、人間は享楽・目標・規範という3つの相互影響の目標フレームワークによって状況を柔軟にとらえることができた。

これに次ぐ Hartmut Esser と Clemens Kroneberg の章「An Integrative Theory of Action: The Model of Frame Selection」（第4章）では、社会心理学における二重処理モデル（Smith 2000）をより精緻化したフレーム選択理論を提示した。それによると、行為者は状況に応じて行動する際に、意図的で反省的なモードで行動することもあれば、非意図的で無反省的なモードで行動することもある。

### その他

第5章の「The Center Cannot Hold: Networks, Echo Chambers, and Polarization」（第5章）では、Daniel DellaPosta と Michael Macy はネットワーク分析の視点からアメリカ社会の多元主義を考察した。経験的な調査が示唆するのは、もともと意見の極化と分断を克服する第三の道と考えられてきた多元主義は皮肉にも、今日のアメリカ社会をそれが避けようとして意見の極化した社会にしている。

第10章の「The Gender Frame and Social Order」（第10章）で、Ridgeway はジェンダー論から社会秩序へとアプローチした。彼女によると、現代においてもジェンダーフレームはジェンダー間の不平等を再生産しつつも、ミクロにおける相互作用の実践を手助けする形で社会秩序の再生産に寄与している。

第12章はボトムアップの視点から社会的秩序を理解する視点を提供している。「Interaction Order: The Making of Social Facts」（第12章）で Anne Rawls は相互行為の秩序は共有された意味を前提とする、という社会学理論で広く共有されている前提仮説を疑い、多くの場合社会秩序は「自生的に」社会的事実として生産されることを例示した。

Hannah Wohl と Gray Fine の章「The Art of Together: Social Coordination as Dyadic Achievement」（第13章）

では、「集合的志向性 (collective intentionality)」という概念を用いて——ともに歩くこと、性交、音楽の共演——などの協働の中で行為者はいかにして、状況に適応し、また他の行為者と交渉してそれぞれの協働を成し遂げたのかを考察した。

15章の「The Legitimacy of Groups and the Mobilization of Resources」でMorris Zelditchは、集団の正当性と社会秩序の関係を検討している。メンバーから資源を動員する集団の正当性は集団レベルでの秩序の前提条件である。一般的に集団の正当性はメンバーのコンセンサスにあると考えられてきたが、Zelditchによると、強制力と原則の相互依存こそ、安定的な秩序が生産される。

最後に、本書を取り上げた理由について触れておく。なぜ本書は読むに値するのだろうか。

第一の理由として、社会学を研究する以上重要な秩序問題を、他分野の知見を援用してアプローチするという意味での必要性和新しさである。そもそも秩序問題はなぜ重要なのか。その一因として、社会をその内部からしか観察できない社会学者にとって、秩序問題は不可欠な自己観察の理論として機能するからであるからだ。社会を内部からしか観察できないとはすなわち、社会への我々の観察も必ず社会的なものである。例えば社会を捉える理論はそれ自体も社会的なものにならざるを得ず、またフィールドに出かけて参与観察する社会学者なりインタビューする者なり誰も自らをその相互行為から排除することはできない。この観察の内部性は社会学者に自己観察を義務付ける。すなわち、「何が私の観察を可能にしているか？」を問わなければならない。なぜなら最初から理論の外部から理論基盤を提供してくれる＜神的なもの＞はそもそも存在しないからである。社会学の理論は自らを根拠づける自己理論となることを余儀なくされ、内部観察は自己理論とは表裏のものである（佐藤 2011）。まさにこの意味で秩序問題は自己観察を手助けする理論である。前述したように、秩序問題の背後には、秩序への理解、さらには「社会とはなにか？」といった社会学の核心に近い一連の問いが絡んでいる。換言すると、社会が「社会」として見られる時点ですでに、秩序問題は何等かの形でその観察の背後にある。従って秩序問題を問うことは観察者が自分の観察を観察することを意味する。しかしこの社会学の基底にある自己言及性はまた同時に社会理論に深刻な問題をもたらしかねない。というのは——「私は今嘘ついている」のように——自己言及は説明を逆説化する恐れがある。だからこそ本書の「社会心理学」の部分は、必要性を持つようになる。なぜなら脱逆説化の手段の一つとしては、説明の水準を分離する方法がある。すなわち、＜観察の観察＞の理論としての秩序問題は、社会への観察とは異なる説明水準——すなわち社会心理学的な知識の援用——で行われた方が、強力になる。社会学を研究する以上、不可欠な自己観察の理論にその威力を発揮させる説明水準を提供した意味において、本書は一読する価値がある。

もう一つ理由としては、面白さがあげられる。秩序問題は面白い。あえて言えばそれも社会学の面白さの理念型に近い形での面白さである。社会学において「面白さ」はしばしば試金石のように扱われ、社会学者は常に何等かの「意外性」を期待している。これは社会学者の人格的な特質から由来するものかもしれないが、それ以上に、このような社会学者を寄せ集めた社会的な問いの構造から由来するものだ。喩えると社会学を研究することはジグソーパズルを遊ぶようなものかもしれない。というのも社会学は、社

会が日常生活的な意味次元ですでに成立しているにも関わらず、それをわざわざ崩壊させ、またそれを社会学的な意味次元で再構築する営みであるように見える。そして人はなぜか、多重な意味次元の間で行き来することで面白さを覚える傾向があり、この意味で社会学はその問いの構造から由来する「本質的な」面白さを持っている。社会学の問いの構造の典型としての——秩序がすでにあるにもかかわらず、「それがいかにして可能か」と問い直す——秩序問題も、この理由で面白い。この意味で、社会心理学の知見を援用して秩序問題へとアプローチする本書は、ただただ堅苦しい研究書としてではなく、社会学とともに歩くと決めた以上、「お節介な」知的戯れを付き合うことで、社会学そのものを知る機会でもある。

## 参考文献

- [1] Davis, K. (1959). "The Myth of Functional Analysis as a Special Method in Sociology and Anthropology." *American Sociological Review* 24(6): 757-772.
- [2] Garfinkel, H. (1964). "Studies of the routine grounds of everyday activities." *Social problems* 11(3): 225-250.
- [3] Hobbes, T., & Dunn, J. (2010). *Leviathan: Or the Matter, Forme, & Power of a Common-wealth Ecclesiasticall and Civill*. Yale University Press.
- [4] Lockwood, D. (1956). "Some Remarks on "The Social System"." *The British Journal of Sociology* 7(2): 134-146.
- [5] Parsons, T. (1937). *The Structure of Social Action*. New York, Free Press.
- [6] Smith, E. R. and J. DeCoster (2000). "Dual-process models in social and cognitive psychology: Conceptual integration and links to underlying memory systems." *Personality and social psychology review* 4(2): 108-131.
- [7] 盛山和夫. (1991). *秩序問題と社会的ジレンマ*, ハーベスト社.
- [8] 佐藤俊樹. (2008). *意味とシステム：ルーマンをめぐる理論社会学的探究*, 勁草書房.  
——(2011). *社会学の方法：その歴史と構造*, ミネルヴァ書房.
- [9] Taylor, M. (1987). *The possibility of cooperation (Studies in Rationality and Social Change)*, Cambridge University Press.
- [10] Wrong, D. H. (1961). "The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology." *American Sociological Review* 26(2): 183-193.